

FUTANARI

For水屋金庫

Girl
×
Futa



R18
Adult only



TEACHER

放課後、夏美カレンは、担任の藤宮藍に
生活態度の指導を受けていた。

「学生の本分は勉強です、
あなたは家に帰らず毎晩何をしているの？」

（あうざいな、
私の本分は楽しく生きる事です）

（藤宮の説教ながー、
ホント、クソ真面目、絶対処女でしょ）

（そうだ♡
ちよつとからかってやるか♡）



昨日はまず、
大学生三人の金玉が
カラッぽになるまでやって、

「れるっすりゅう♡
んむっ♡じゅぽっ」

カレンは三人の男を同時に
相手をしている。
口でペニスをむしゃぶり、
手で弄び、ま〇こで絞り上げる。

「うわあっ…
舌が…出るうっー」

「うう…カレンちゃんスゴッ
手コギ上手すぎ！」

「また射精する！
ちよっ…もう出ないって!!」

「じゅぽっ♡何言ってるの
まだまだ頑張ってよ。ホラホラ。」

ちんぽってき、
やっぱ反応が面白いよね、
射精して震える所なんて
カワイイし♡



硬い男の後は
やわらかい女の子
男とはまた違う味があるんだよね♡

「あん♡んくっ♡
もっと腰振りなよっ」

「やああん♡
凄い吸いっつっ…
あっ、ふん、ああん♡」

互いの性器を蛇の様に絡ませ合い
性感を高め合う
カレンは明確なお終わりのない
レズセックスもお気に入りだった。

「ああ♡
ふうああん…またイクっ♡
アソコ融けちゃうよう♡」

「クスッ♡もっとグチヨグチヨに
してあげる♡
腰をこうやって…♡」

「あっああ…っ♡」

年下のカレンに弄ばれ、
まともに返事も出来なくなった女を
カレンは飽きるまで騷り続けた。



「あれっセンサーどうしたの？」

気が付くと藤宮が蹲っている。
体調でもわるいのか
額には汗が滲んでいる。

「？」

凜とした普段の態度との
違いにカレンは訝しむ。

「なっ何でも：無いわ、
す、少し立ち眩んだだけよ。」

そう言いながら腰を震わせながら
座り込んでいる藤宮

（あれっこのニオイ…）

その時嗅ぎなれた匂いが
鼻を掠め
カレンの直感が働いた。



「夏美さん!!
や、やめてー! 離しなさい!!」

カレンは藤宮の後ろに回り込むと、
手早く股間に手を潜り込ませ
触りなれた『モノ』を取り出す。

「やっぱり♡ちんぽだ♪
せんせーってふたなりっヤツ?
初めて見た〜」

藤宮はカレンを振り払おうとするが、
ちんぽを巧みに弄られ、力が入らない。

「お、怒るわよ!
早く手をどけて!」

「私のエッチの話を聞いて勃起させといて
説得力ないな〜」

「や、やめ……」

カレンは亀頭を優しく揉みこみ
裏筋を強く擦り上げる。
藤宮のふたなりちんぽは容易く
射精へと導かれていった。

ビク
ム
ビク

「いやあつ！」

射精ちゃう!!
だ、駄目よ、ダメ!!」

藤宮は体を震わせながら
自らのちんぽから精液を吐き出した。

「あはっ♡せんせゝ弱い♡
溜まってたんだね、
ほら、もっと射精しなよ♡」

カレンは手の中で脈打つちんぽを
さらに弄び続けた。



「ん…はあはあ…
もう気が済んだでしょう？
手を放して、お願いよ。」

一度射精しても
カレンの手でしごかれ
再び硬さを取り戻しつつある。

藤宮は、硬直したちんぽを握られると
痺れる様な快感が下半身に流れ、
思うように体を動かせなかった。

「あはっ♥まだまだ出るよね？
匂いでわかるんだ〜ワタシ♥」

懇願する藤宮に対して
カレンはお気に入りの玩具で
遊ぶ子供の様に
目を輝かせていた。



「じゅぽっ♡んむう♡
ずりゅううっ♡じゅりゅ♡」

カレンは美味しそうに
ちんぽを口に咥えた。

「ま、待って…あつ
な、夏美さん待って！」

口でちんぽを責めるのは
カレンにとって大好物だった。
唇で吸い付き、舌で蹂躪し、
頬で啜り上げる。

「ひっ♡あつ♡くう、はああ♡」

カレンのフェラに

藤宮は満足に息も出来なかった。

蕩ける様な快感と一緒に、

下半身が呑み込まれていくような

恐怖が背筋に走っていた。



「あっ♡はああ♡くぅ…♡」

藤宮は我慢することができず、一度目の射精より多くの精液をカレンの口の中に吐き出していた。

「う…ん…くっ…んくっ…くっ…くっ…」

ドプ
ビュクシ

先程より多い精液を殆ど零すことなく飲み干すカレン。彼女の瞳はまだ満足の色は浮かんでいなかった。

「今日、泊めてよ、先生の家になさあ、ね、いいでしょ？」

藤宮は自分に断るという選択肢が無い事が二度の射精で思い知らされていた。

マンションに着くと、
シャワーを浴びる時間も惜しく
藤宮をカレンは押し倒していた。

「へっ、勃起してないと
普通の女の子と同じじゃん。」

カレンは遠慮なく藤宮の
胸や股間、太もも、お尻を
愛撫し始めていた。

「夏美さんお願いよ、
もう止めましょう、
生徒とこんな事いけないわ。」

藤宮は聞き入れて貰えないと
知っているのに、
懇願を続けていた。
けれど言葉とは裏腹に体の奥は
熱を昂らせていた。



「レロ、ちゅっ、

センセのおっぱい大きい♥

乳首もプリプリで凄いエロい♥」

カレンは藤宮の乳房を

丹念に揉み込み、乳首を舐め転がす、

（やだっ！おっぱいが熱い、

この子上手すぎる！）

女の子を責めるのも好きな

カレンにとって

両方の性を持つふたなりは

セックスの相手として

最高だった。

ビュッ

「んふ♥おっきいおっぱいとちんぽ最高♥

センセの事好きになっちゃいそう〜」

ビュン！！

カレンの言葉に動揺する藤宮。

今までそんな事を言われた事がないからだ。

カレンは宮藤の唇を奪うと
蛇の様に舌を絡めた。

「ん♥あむっ♥れる」

二人の間に挟まれた
ちんぽからは、
甘い疼きが広がっている。

「うふ♥れるっ♥」

ほら、もっ舌出して♥」

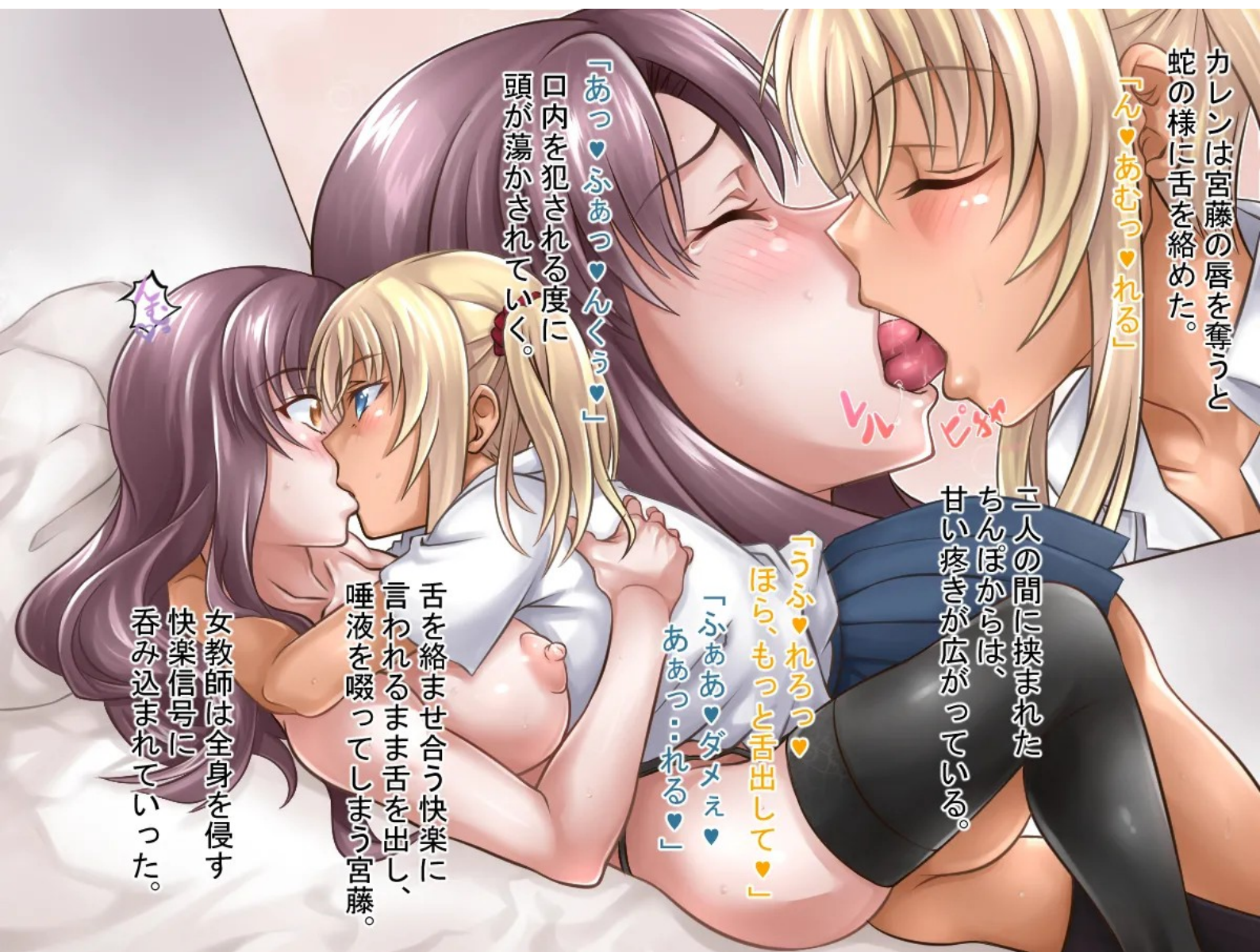
「ふああ♥ダメえ♥
ああっ♥れる♥」

「あっ♥ふあっ♥んくう♥」

口内を犯される度に
頭が蕩かされていく。

舌を絡ませ合う快樂に
言われるまま舌を出し、
唾液を嚙ってしまう宮藤。

女教師は全身を侵す
快樂信号に
呑み込まれていった。



「いやあ♥溶けちゃう
ちんぽ溶けちゃう♥
もう許してえ♥」

カレンは宮藤の下半身を
抑え込み、
口で再びちんぽを犯しだした。

「れるっずりゅう♥あむ♥」

しかしそれは、射精させる為の
口淫ではなく、
じっくり、たっぷりと
性感を高める為の回淫だった。

「あっ♥ふあああ♥んくう♥」
（いやあ♥射精しそうなのに!!
凄くイイのにい♥どうしてえ!!）

当に射精している程の快感を
受けながら、
射精できない快樂地獄。

「じゅぷっ、れる♥れる♥」

カレンは快樂に見悶えする
相手の姿が大好きで、
宮藤の乱れる姿をもっと見ようと
さらに責めはじめた。

「おほっ♥んおう♥」

獣の様な声を藤宮は上げた。
四つん這いになり
尻をカレンに捧げるように
持ち上げている。

「じゅるっ♥れる♥
ぴちゃ♥」

カレンは藤宮の股間に
顔を埋め、ソコにある
全ての性器を舐る。

じつくり、たっぷり、ねっとり、
尻穴、ヴァギナ、ちんぽを
隅々まで舐め上げる。

「あっ♥はああっ♥
おおっ♥イクっ♥ダメエ♥」

潮が満ちる様に女の絶頂が
ゆるく、長く続く、
ちんぽは震えながらも
まだ射精していなかった。





「いやあ♥あうう♥
キツいい♥ちんぽ響くう♥」

女性器を蹴りながら
乳しぼりの様にちんぽを
絞り上げる。

「あはっ♥手の中で
ビクンビクンしてるう♥」

「あぐう♥許してえ♥
もう許してください!」

快感に頭が煮え溶け、
教師のプライドが崩れ、
生徒に許しを懇願する。

「ウソはダメだよセンセ、

まだまだ精液が溜まってるの
匂いで分かるんだから♪」

そう言うとともに
ちんぽを責め立てる。

「そ、そんな、いやああ♥」
自分の肉体が底のない
悦楽に落ちていくのを
藤宮は感じていた。

ビクン

ゴリッ

ゴリッ

んぐんぐ

カレンは背後から藤宮の胸を好き放題に弄び、足コキでちんぽを愛撫していた。

「あはっちんぽこんなにして
説得力ゼロだよ。」

経験があるの分かってるんだから
ほら、センスの初体験教えてよ。」

そう言つと足コキを強める。

「あつくう、

わ、分かったから
扱かないで…」

「ねえセンセってこのちんぽで
どれくらい遊んできたの？教えてよ。」

「そ、そんな事してないわ！」

私は教師よ、そんな淫らな事！」

そうして藤宮は自分の性体験を語りだした。
ちんぽを撚られるとカレンに従ってしまう事に彼女自身まだ気付いていなかった。

○学二年の時、担任に強姦されたの、
担任の先生は私の体の事も知ってたし
美人で優しい先生だった。

はー♡

はー♡

（でもある日の放課後、
保健室に呼び出されて…
先生は私と同じふたなりだった。）

（もし親の転勤が無かったら
私はあの人の奴隷になっていた。
でもその後何度も夢に見たわ。）

ガクガク

（だから私は教師になったの。
あの人と私は違う、悪夢に
負けないために…）



「へっっセンセってレ○プで
マゾ覚醒しちゃったんだろ。」

「な、何を言っているの!!
私はそんなのじゃないわ!」

「それを否定する為に
ずっと我慢してたんじゃないん?

こじらせてるねろ。」

「ち、違うわ、そ、そんな、」

カレンの指摘を

懸命に否定しようとするが、

言葉が出てこなかった。

しかし心はその指摘に震えていた。

「必死に否定しちゃって、
センセ気付いてない?」

「え?」

「センセのちんぽ、
レ○プされた話した後、
スッゴい硬くなってるよ。」



「う、ウソ…、
私、そんな…」

否定しようにも、
彼女のちんぽはへそに付く程
反り返っていた。

「アタシの足コキの所為じゃないよ。
センセが自分で勃起させてるんだよ。」

カレンは器用に足でちんぽを
撫でまわし、裏筋を擦り上げる。

「あぁっ♥待って、
お願い、これは違う、違うの！」

自分の体に戸惑い、
痺れる様な快感がまた
脳髓を蕩けさせていく。

ビキ

ビキ

「クスっもう往生際が悪いな、

アタシの足コキで

自分がどれだけスケベなのか
認めさせてあげる。」

ちんぽが折れる程の強さの足コキ。

「おほお♥あざいい♥」

だが感じるのは強烈な甘い痛み、おっぱいも乱暴に揉まれているのに焦げる様な快感が生まれる。

「どうして？痛いはずなのに！
わ、私本当に……」

ゴリっ、と音がする様な足コキの衝撃に藤宮の思考は霧散する。

「ホラッ！弱ちんぽで覚えてセンセ！
自分がどれだけスケベマゾ女なのか！」

「あざいい♥あがつ♥
ちんぽ壊れる、こわれひゅうう♥」

藤宮は何度目かももう分からない
射精の快感に、
叩きのめされ、躡けられ、覚えさせられた。
自分がただ屈服するだけの存在だとい
う事に。



幾度もの射精で
藤宮の意識は朦朧としていた。

「あ……くう……」

「なにへばってるの？」

私はまだ1回もイッてないんだから、

こっから本番じゃん？」

「え……そんな、夏美さん……」

数え切れない程の絶頂。

それなのにまださらに続く

快楽地獄に藤宮の心は

壊れそうになる。

「名前、カレンでいいよ、センセ♥」

「!!」

カレンの中に藤宮のちんぽが
呑み込まれる。

最初は優しく、しかし奥まで
呑み込むと一転、肉壁の一つ一つが
吸いつき、背骨が抜ける様な
快感が生まれた。

カレンは藤宮の足を抱え込み杭打ちの様なピストンでちんぽを貪り食っていた。

「あん♡センセのちんぽ最高♡
オラ♪腰、動かしなよ、んふう♡」

「ああん♡カレンの中凄い♡
こんな…んくあ♡ひああ♡」

今までの快楽とは違うセックスの熱量に藤宮は呑み込まれていった。カレンは自分の腹に生まれた熱い痺れを楽しんでいた。

「イイよ♡このちんぽイイ♡
あはっ相性いいよ私たち♡」

「ああ♡ひああ♡んう♡」
藤宮はへこへこと腰を合わせてカレンの子宮を突き上げる。

「ああん♡んふうあん♡」

カレンも性感が高まり余裕が無くなりつつあった



猛然と腰を動かし快楽を貪るカレン
彼女のセックスには遠慮という物がなく、
荒々しく、それでいて柔らかくて貪欲だった。

はぁ♡

「ああ♡いいよお♡

ま〇こ気持ちいい♡最高う♡」

胸を弾ませ宮藤は
嬌声を上げる。

「ひぐう♡ちんぽ溶けちゃうう♡
おほおお♡おへうう♡」

カレンは絶頂に向けて
さらに腰の回転を上げて。
それから生まれるマグマの様な
快感に酔いしれた。

そこには堅物教師の姿は無く
ちんぽの快楽に
没頭する獣の姿だった。

「いくうう♡精液でるうう♡
射精するう♡おほおお♡」



「イクうう♡あはっ♡

イクっまたイツちゃうう♡」

「あぐうう♡んほおお♡イぐうう♡

ちんぽおお♡壊れりゆうう♡ちんぽおお♡」

カレンの膣の絶頂の締め付けで
ちんぽが壊れた蛇口のように
射精していた。

「お腹アツツ：んくっ

イクっ、ああん♡」

カレンは膣に広がる
精液と快楽の熱を愉しんでいた。
逆に藤宮は体が空っぽになる様な
底なしの絶頂に完全敗北していた。



「あっ……うう、くう……」

藤宮は半ば意識を失い
ちんぽからはトプトプと
精液を漏らしていた。

「ねえセンス、もう少し
がんばろっか？」

カレンは絶頂に痙攣する
藤宮を愛撫しながら
甘く囁いた。

「ああ……そ、そんな……」

もう、ゆ……許してください……」

藤宮は許しを請うが、
限界だったちんぽが再び硬くなる。
自分の体に裏切られ、
二人のセックスは朝まで続いた。

忘れようとした
女の膣の快感に、
ちんぽはもう抗う事はできない。

——それからカレンは藤宮の家に居座り、家でも学校でもふたなりちんぽを愉しんだ。

「ああ、カレン♥

待って、人が来ちゃうわ♥
んくう♥ふうう♥」

「ずちゅ、ずりよ♥」

使っていない教室といえ
学校でのセックスは危険すぎる。
だが藤宮に拒否権は無かった。

「んちゅ♥ずりよおお♥」

腰が抜ける様な口淫の快感、
少女に支配される快感、
自分が破滅する快感、
もう藤宮は完全に隷属していた。

「ふああ♥おくち

気持ちイイ♥ああ♥」

彼女の中にはまだ
教師としての矜持はある。
しかしそれは何の
力も持たなかった。

「はあっ、ふうっ、んくう♥」

「ああん♥センセ気持ちいい♥
もつと激しく♥あん♥」

授業中にもかかわらず
二人は女子トイレで
セックスに耽っていた。

「カレン♥カレン♥」

ふうう♥あっ♥んう♥

「スゴい必死♥あはっ
カワイイよセンセっ♥」

「!!」

カレンの囁きに
藤宮の胸には幸せが広がる。
ちんぽは更に硬くなり
カレンの膣を掻き回す。

「カレン♥好き♥何でもするから
お願い離れないで!お願いします!」

「あっイク♥またイツちゃう♥」

藤宮の懇願にカレンも
胸が高まる。

二人は幾度も交わり、
絶頂を繰り返した。

―人気の無い深夜、ちんぽにリードを付けられ、
裸同然の姿で藤宮は歩かされている。
もし誰かに見つければ教師生命が終わる。
それなのにちんぽは興奮でガチガチになっていた。

（ああ、歩く度ちんぽにリードが食い込む。
いけない事なのに、興奮を抑えられない…）

リードを持つカレンは
犬の散歩の様に
自然に歩いている。

「ほら、速く歩かないと誰かに
みつかっちゃうよ？」

リードを強く引っ張るカレン、
しかし痛みは無く
下半身が蕩ける快感が走った。



公園のトイレに放置されてどれだけ時間が経ったか、藤宮にはもう時間の感覚が無かった。ま〇こに突き立てられたバイブで幾度もメスイキしたが、ちんぽに付けられたローターは振動が弱く、一度も射精していなかった。

（ちんぽツライ♡ちんぽツライ♡マゾちんぽイキたい♡んぐぅ、ま〇こまたイクゥ♡）

絶頂の波が治まる度に不安が広がる。このままカレンが迎えに来なければ自分はどうなっているのか、飼い主を待つ犬の気持ちでカレンを待ち続ける。不安と快楽で藤宮の思考はグチャグチャになった。

（お願い、カレン早く帰って来てえ♡
おぐぅつまたいぐぅ♡帰って…イクゥ♡
見捨てないでえ♡おほお、んおお♡）



「センセ、お待たせ♥」

数時間後、カレンが何事もない様に戻ってきた。
その瞬間、見捨てられなかった安堵が
引き金になりその日一番の絶頂を向かえる。

「んごおおお♥んおほおお♥」



精液と一緒に藤宮の教師としての
品性も排出され、
マゾちゃんぽに酔いしれる女が残った。

「んほおお、うぼおお♥」

「もおセンセ、顔もま○こもぐちやぐちや♥
ちんぽもドロドロ、サイテー♥」

そう言いながら藤宮の頭を愛おしそうに撫でるカレン。
その手の温もりに藤宮は至上の喜びを感じた。

家にいる間は殆どの時間をセックスをして過ごす。

二人にとってそれが自然な事だった。

「あむつれる♥カレン好き、好きです♥」

「私も♥ドスケベな藍センセは大好き♥」

キスをしながら精を放つ、

互いの唇、乳房、性器を擦り合わせ

溶けあうようなセックス。

ふたなりの快楽を骨の髄まで
覚えた藤宮はカレンに捨てられれば
気が狂ってしまうだろう。
だからカレンの求めるまま、
より淫乱に目覚めていった。
セックス奴隷として。



「私のちんぽも精液も全部貴女のモノ♥
ずっと傍に居て下さい。」

そうして誓いのキスをする藤宮、
ねっとり絡み合う互いの舌、
甘ったるい悦楽が脳内を満たす。

「じゅぷっ♥れる♥可愛いこと言うんだから、
センセの全では私のモノだよ♥」

責める程マゾ豚になる藤宮は最高のセックス奴隷だ。
カレンにとって快楽は人生の最優先事項である。
互いに腰を動かしたず、二人のセックスはまだ続く、
より濃く、深く互いの性を解き放った。





名前 夏美 カレン
(なつみ かれん)
血液型 O型
私立葵山女学院〇年生
家族 父、母

男女どちらともセックスする快樂主義者。

初体験は〇学生の時、家庭教師と、女の子は同じ頃同級生と。

底無しと言っていい性欲を持ち主5, 6人の大学生ラガーマンを一度に片づけてしまいヤリサーでも恐れられている。

藤宮には日頃生活態度を注意されており、あまりいい感情は持っていなかった。

両親とは別に不仲でなく、互いに干渉しないドライな関係。



名前 藤宮 藍
(ふじみや あい)
血液型 A型
私立葵山女学院教師
家族 父、母、妹

自分にも他人にも厳しく、真面目な堅物教師。

担当は社会科、生活指導も担当しており生徒に恐れられている。

奔放なカレンには頭を痛めており彼女をいつも指導している。

実はふたなりで〇学生の頃担任のふたなり教師にレ〇プされた経験がある。

その過去が自分はちんぽに支配されないと強く自分を律する様になる。しかし自分を抑圧した結果澱の様に性欲を溜め込んでいた。

休日はビールを飲みながら撮り溜めたドラマを観るのが楽しみ。